

落ち着かない行動・不安・焦燥

	No.	表題	症状・BPSDについて 起こった出来事	事例提供者	背景や生活状況、病状など	症状・BPSDに対して 行った支援	結果 その後のご本人、介護者の状態
1	1	外出から帰ると落ち着かない	ショートステイから帰ってきた日は、そわそわし、お薬カレンダーに入れた薬がなくなってしまふ。数日してから、タンスの中から見つかることがあったり、薬を間違えて飲んでいたり、物が失くすことがあるが、自宅にしばらく生活していると落ち着く。	訪問看護ステーション	独居。10日間程度のショートステイを月に1〜2回利用しながら、デイサービスやヘルパー、訪問看護を利用し生活している。受診時の介助やショートステイの準備は、区内に住む娘が行っている。	訪問看護は定時以外にショートステイの帰宅日に訪問をした。内服薬はお薬カレンダーやデイサービスのバッグの中に準備し、本人にも見て確認してもらった。薬はヘルパー又はデイサービスにて介助で飲んでもらった。	ショートステイから帰ってきた日に訪問することで、薬に対する混乱がなくなり落ち着いて生活することができた。
	2		デイサービスから帰宅後、自分の部屋の場所が分からず、別の部屋のカギを何度も開けようとした。部屋の緊急ボタンを押すことが何度もあった。また、不安になり、マンションから出てしまい帰れなくなってしまった。	居宅介護支援事業所 ケアマネジャー	高齢者専用マンションで独居である。アルツハイマー型認知症と診断されている。	デイサービスから帰宅後の不安を解消する為に、ヘルパーによる迎え入れを行った。自宅内に食べ物がないと落ち着かなくなる為、室内の数か所に軽食やおやつを常時用意した。	ヘルパーの迎え入れや、いつでも軽食やおやつを食べられるように準備することでマンションから出ていかなくなった。
2	3	一人になると不安になる	朝、娘が家を出ると不安が強くなり、「胸が苦しい」と救急車を頻回に呼んだり（週2〜3回）、娘の仕事中に電話をしてしまふ。救急隊員と話をすると落ち着き、バイタルサインの異常はみられなかった。	訪問看護ステーション 理学療法士	娘と同居している。娘は就労しているため、日中は独居である。体力向上目的でリハビリを実施している。記憶力低下と不安症状が著明である。	本人が不安になりやすい時間帯にリハビリを導入し、ストレッチや体操をしながら趣味の話や娘の話を傾聴した。 オペラ鑑賞が好きなため、日中にオペラの音楽を聴けるように娘に準備をしてもらった。 訪問時の様子をノートに記載し、家族と多職種（看護師・ケアマネジャー）で共有をした。	訪問直後は表情が硬いが、話や体操をする中で表情もほぐれ落ち着いて過ごせることが多くなった。独居の時間帯も自分で音楽を聴き、落ち着いて過ごせることが増えた。漠然とした不安や被害妄想的な発言もあったが、ノートによって事実確認ができ、チームとして関わることでできた。娘からは「様子が分かって安心できました」「リハビリの日は、晩ご飯を作って待っていてくれることもあった」との言葉が聞かれた。
	4		夫の外出後、どこに行ったのか不安になってしまう。何度も窓から覗いたり、心配だという言動がある。	看護師	夫と2人暮らし。夫は仕事や用事で外出することがある。	ホワイトボードを利用し、日付と時間、どこへ出かけたかを記載した。	見ることで思い出し、安心感が得られた。不安の軽減につながった。

落ち着かない行動・不安・焦燥

	No.	表題	症状・BPSDについて 起こった出来事	事例提供者	背景や生活状況、病状など	症状・BPSDに対して 行った支援	結果 その後のご本人、介護者の状態
3	5	夕方になると不安になる	着替えや排泄などが出来なくなり、アルツハイマー型認知症の診断を受けた。夕方になると、就労中の娘が帰ってこないと心配し外に出てしまい、一人歩きに結びついてしまう。	居宅介護支援事業所 ケアマネジャー	本人と夫、娘と3人家族である。マンションの3階（エレベーターなし）で生活している。娘は日中就労しているため、夫が対応している。夫は膝痛・腰痛を抱えており、長時間の立位は困難である。食事作りなど家事全般は娘が行っている。家族関係は良好。	活動量を増やすために、「認知症対応型通所介護」の利用を開始した。（週3日）	週3日デイサービスを利用することで、活動量が増え、夕方外に出ることがなくなった。夫のレスパイトにもなっている。
	6		夕方の時間帯に、帰宅願望が多くみられる。強い不穏はないが、落ち着かない様子で席を離れ、不安そうな表情で「暗くなる前に帰らないと…」「そろそろ帰ります」などと職員に話す。	小規模多機能型居宅介護 介護職	娘と2人暮らし。娘は就労されているため週5日デイサービス利用（夕食を食べて帰宅）。また、月1～2日宿泊を利用している。	傾聴し、夕食時間や帰宅時間を伝えると納得し落ち着くが、幾度も話すときもある。本人が苦手とする相手に対して距離を取ろうとしていた結果、帰宅願望につながっていることも分かったため、座席位置の工夫をした。	帰宅願望もなくなり、落ち着いて過ごせる時が増えてきた。また、笑顔も沢山みられるようになった。
	7		玄関のドアをたたいて「帰りたい」という帰宅願望があったり、施設内を歩いて不穏状態になってしまうことが多々ある。	小規模多機能型居宅介護 介護職	独居であるが、息子が朝食、夕食の準備をしてくれる。認知症以外の病気はない。	夕方になると「息子が家で待っているから帰りたい」と話す。男性スタッフを見て「息子がいた」と言う事がよくある。息子と認識されたスタッフは、息子であるという内容は肯定も否定もせず、「今宿題をしているから、終わったら一緒に帰ろう」などと声掛けし、なるべくゆっくりと本人が落ち着けるよう振舞っている。	息子と認識されたスタッフに「私も一緒に手伝うから宿題終わらせて早く帰りましょう」と話しながら、スタッフのそばで落ち着いて座っている。
4	8	家族のもとに帰ろうとしてしまう	娘が忙しく、ほとんどグループホームに来ることができない。家族が来ないさみしさか、「～が死んだ、～が病気になった、家に帰らなければならない」と頻回に話す。荷物をまとめ、タクシーを呼んでほしいと話す。	グループホーム 介護職	独居。転倒による骨折のため入院。その後、老人保健施設を経てグループホームに入居。夫は死別し、娘がキーパーソンである。本人は何でここにいなければならないか理解できていない。1人でも生活できていると思っている。	安心してもらえるような声の調子で「家族の方は病気ではない」「亡くなってはいない」と話をした。それでも本人が納得できない時は、家族に電話をし、直接話をしてもらった。	本人は、家族と話をすることで落ち着くことができた。夜間帯は家族が対応はできないため、「明日、管理者が来たら対応する」と返事をする事で、納得し落ち着いている。

落ち着かない行動・不安・焦燥

	No.	表題	症状・BPSDについて 起こった出来事	事例提供者	背景や生活状況、病状など	症状・BPSDに対して 行った支援	結果 その後のご本人、介護者の状態
5	9	家に帰ろうとしてしまう	デイサービス利用時に何度も「さあ、帰ろう」と落ち着かなくなる。色々な部屋のドアを開けた後、トイレに行って席に戻ることを繰り返す行動がみられた。	グループホーム 介護職	独居。認知症のため服薬管理ができなくなり自己中断している。デイサービス週2回、訪問介護週10回利用。デイサービス以外はほとんど家で寝て過ごしている。	「気をつけてお帰りください」と否定せず見守り、レクリエーションに誘導したり、「この作業が終わったら帰りましょう」と声をかけたりして帰宅への気持ちを紛らわせるようにした。しばらくは落ち着くが、1日のうちに何度かは同じことの繰り返しが続いたのでスタッフはその時の状況に応じて声掛けの内容を変え、対応した。	デイサービスを利用して半年経ち、以前よりは落ち着かなくなる回数が減った。
	10		話をしていると昔のことや夫の事を思い出して泣き出し、自分のロッカーへ行って帰りの準備をすることがある。	デイサービス 介護職	まわりの人に気を遣って、スタイルや顔をほめたり、食べ終わった食器を自分で片付けをしようとする。テレビを見る場所も他の人が後に居ると後ろに移動する。	気持ちをリセットするために、テレビで好きな歌番組を流したり、知っている歌と一緒に歌ったりして、楽しさを共有した。	本人が知っている歌が流れると一緒に歌って穏やかな表情になり、デイサービスで過ごせるようになった。
	11		「帰りたい」「帰らなくちゃ」と話す。「子どもは、どうしてるかしら」と心配している様子が見られた。	小規模多機能型居宅介護 介護職	以前は杖歩行であったが、現在は使用せず、比較的安定している。朝食は自宅で、昼・夕食は施設で食べている。	「お子さんはお仕事へ行かれていますので、こちらで過ごしてお夕飯を召し上がって帰るとお子さんも安心しますよ」と伝えた。	理由を聞いて「そうね」と安心して席に戻った。
	12		デイサービス利用中は、常に家族のことが気になっている様子。特に子どものことが気になり、「家で三人の子供が待っている」と帰宅願望が強くなり、玄関より出ようとするのが数回あった。	小規模多機能型居宅介護 ケアマネジャー	独居であるが、日中は自宅が息子さんの仕事場となっている。週に5日のデイサービスを利用している。	ソファと一緒に座り、手をつなぎながら子どもの事や両親の事を本人が話すのを傾聴した。話は次々に変わっていき、時には話す内容が理解できないことがあっても、相槌を打ちながら傾聴した。	傾聴していると、本人は次第に落ち着き、そのまま寝てしまうこともあった。
	13		本人から「帰ります」「妹に好き勝手やられてます」などの言葉が聞かれる。デイサービスのスタッフに対して、攻撃的なこともあった。	グループホーム 介護職	自分の事は自分ででき、スタッフの手伝いもしてくれる。穏やかに日々過ごしているが、帰宅願望や被害妄想が出ることがある。	「もう帰ります」と言うような発言には「そういえば桜がキレイでした。お花見にはよく行かれました？」などと、あえて全く違う話題に話を持っていくことで、気分の転換を図った。	話しかけによる気分転換により、暗い表情が笑顔になった。
	14		「帰りたい」「お腹痛いから帰らせて」等の言葉が聞かれる。	デイサービス 介護職	孫夫婦が主介護者となり、一緒に生活をしている。	隣に座って、まず何時に帰るのかを伝えた後に、本人の訴えを聴きながら話を広げて昔話などをした。	話をすることで安心し、帰る頃には「ありがとうね」という言葉が聞かれた。

落ち着かない行動・不安・焦燥

	No.	表題	症状・BPSDについて 起こった出来事	事例提供者	背景や生活状況、病状など	症状・BPSDに対して 行った支援	結果 その後のご本人、介護者の状態
	15		デイサービスに到着すると、「夫（または孫）が具合が悪いから帰らなければ」と言い、応じないと暴言がある。入浴時、脱衣室までは行くが、服を脱がないなどの拒否がある。	デイサービス 介護職	夫と2人暮らし。夫が妻の介護をするのは難しい状況である。昔、洋裁が得意だった。	まず、じっくり話を聞き、タイミングを見計らって、服の話や孫の話へと徐々に話題を変えていった。	しばらく話をすすめていくと笑顔が見られ、落ち着いてきて、他の利用者と談笑したり、スムーズに入浴できるようになった。
	16		帰宅願望があり、ロッカーへ行って、かばんを持ち、上着を着ると玄関へ向かって帰宅しようとするがあった。	介護老人保健施設 介護職	夫婦2人暮らし。ピックアップ（四点歩行器）にて歩行が可能である。デイサービス（週3日）を利用している。昼食後から帰宅願望あり。	玄関近くに椅子を置き「今、バスの準備をしているから、運転手さんが来るまで、一緒に帰りの体操をして待ちましょう」と伝え、スタッフが一緒に座り帰宅まで話をしたり、話題を変えたりした。	帰宅願望は落ち着いた。
	17		フロアから玄関に向かい、外に出ようとドアを開けようとする。声をかけると、暴言が返ってくる。	小規模多機能型居宅介護 介護職	1人暮らし。デイサービスへは息子さんが送迎している。	落ち着かない様子でフロアを行ったり来たりする時は、隣に座り話をするようにした。	担当のスタッフを決めて話しかけたり、隣に座って話をするると落ち着いた。
6	18	思いをうまく伝えられないとイライラする	言葉がうまく出ず、イライラしている。	小規模多機能型居宅介護 ケアマネジャー	息子と2人暮らし。息子は、仕事のため帰宅が遅い。認知症状があり、1人では日常生活が成り立たない。	毎回同じ職員が、本人の落ち着く場所へ一緒に行き、15分ほど側にいるようにした。	本人の安心できる場所でしばらく付き添っていると落ち着いてくる。
7	19	落ちつきなく1人で外出してしまう	1人で外出しようとする。食べたことを忘れてしまい、度々台所や冷蔵庫を開けて食べ物を探す行動がある。	グループホーム 介護職	前頭側頭型認知症と診断された当初は、介護拒否や暴力・暴言があった。その後、落ち着きグループホームへ入居となる。	外出しようとするタイミングで、散歩に誘った。間食を用意した。	はじめは散歩をしても、その直後でも外出しようする事があった。散歩に付き添い始めて3カ月目頃から、グループホームの生活に馴染み、外出しようとする事が無くなった。
8	20	夏でも厚着をしてしまう	夏でも厚手の物を着てしまうので、ハンガーにかかった服の衣替えをした。すると、「物を盗られた」「誰か来た」などと落ち着かなくなり、職員が衣替えの説明してもずっとそわそわしてしまっただ。	グループホーム 介護職	グループホーム入居中。アルツハイマー型認知症があるが、基本的に自立しており自室内で過ごすことが多い。	冬服を元の場所に戻した。冬物を着て汗をかいているのも心配だったが、本人の気持ちを配慮しエアコンの調整や水分を多めに取ってもらうようにした。	今まで通り、自室で落ち着いて過ごせるようになった。

落ち着かない行動・不安・焦燥

	No.	表題	症状・BPSDについて 起こった出来事	事例提供者	背景や生活状況、病状など	症状・BPSDに対して 行った支援	結果 その後のご本人、介護者の状態
9	21	タンスに物を隠してしまう	自室のハンガーラックにかけていた服を何枚も着込んでしまうことがあったので、必要な分だけ残し、他は押し入れなどにしまった。服を盗られたと思った様子で、コーヒーカップなど物をタンスの中に隠してしまうことが続いた。何度もタンスの整理をされ、落ち着かなくなった。	グループホーム 介護職	自室で1人で過ごすことが多い。ほとんどのことは自分で出来る。	洋服をハンガーラックに半分ぐらい戻し、元の環境に近づけた。	本人は、タンスに物を隠すことがなくなり、落ち着いた。
10	22	集団での活動を受け入れられない	施設の色々なクラブ活動には参加せず、「疲れる」「苦しい」と引きこもっている。リハビリでは体調に合わせてマッサージや歩行訓練をしているが、それも「やめる」と言う。	居宅介護支援事業所 ケアマネジャー	施設入所中の90歳代の方。毎週、施設に娘が訪問し世話をしているが寂しいと訴える。	集団活動にこだわらず、個別対応を重視してリラックスしてもらえるように、足浴をしながら本人の気持ちを傾聴するようにした。	足浴は気に入っており、その時間は穏やかな時間を過ごしている。
	23		デイサービスの2～3時間は、夫と楽しく参加できているが、大人数の施設では不安が強く、その後は拒否してしまう。	訪問看護ステーション 看護師	夫のサポートもあり、生活面においては大きな支障なく過ごしている。短期記憶障害は著明である。	話を傾聴するようにした。口腔体操や足浴をしたり、一緒に合唱したりしながらコミュニケーションを取った。	数か月後には、馴染みの関係ができ大人数のデイサービスでも表情が明るくなった。
	24		意欲低下によりデイサービスの拒否があった。家では寝ている時間が多く、昼夜逆転がみられている。	居宅介護支援事業所 ケアマネジャー	娘と2人暮らし。一日に何度も娘や訪問看護ステーションに不安を訴える電話がある。曜日・時間・季節が正確に答えられない時がある。	生活リズムの改善と日中は他者との交流が図れるように、デイサービスを勧めた。デイサービスの職員が訪問し、安心してもらえるように関わった。	顔なじみの職員がいることで、レクリエーションを楽しめるようになった。最初のうちは緊張から食事量も少なかったが、1か月後くらいからはほぼ全量摂取できており、日常生活の安定化を図ることができた。
11	25	病院で待てない	膝の痛みのため、近隣の提携病院の整形外科へ車椅子で受診となった。待ち時間が1時間以上かかり、その間「保険証持った？」「お金持った？」の会話を繰り返し、歩き出そうと車椅子から立ち上がることがあった。	特別養護老人ホーム 介護職	特別養護老人ホーム入所中。食事をすぐ食べられる状態まで用意すれば、自身で食べることが出来る。	同じことを繰り返し話す時には、終始穏やかな口調で対応した。 また、歩き出そうとする時には、話をしながら、車椅子で院内フロアを移動しながら気分転換を図った。	立ち上がることや転倒することなく、受診は滞りなく実施できた。

落ち着かない行動・不安・焦燥

	No.	表題	症状・BPSDについて 起こった出来事	事例提供者	背景や生活状況、病状など	症状・BPSDに対して 行った支援	結果 その後のご本人、介護者の状態
12	26	何度も同じことを尋ねてしまう	「私はいつからここにいるんですか？何にも思い出せないんです」「今日は何年の何月ですか？」と何度も同じことをた尋ねる。	グループホーム 介護職	忘れることに対する不安のため暗い表情になる。	「忘れるという事は年齢相応なことで私も忘れるし、今と明日を楽しみましょうよ。明日天気良かったらお出かけしましょうよ」と声掛けをした。	本人より「あー安心しました。いくら考えても思い出せなくて…でもこれですっきりしました」という言葉が聞かれた。
	27		息子さんの来訪日について決まり事があるが、忘れてしまい何度も尋ねる。	居宅介護支援事業所 ケアマネジャー	サービス付高齢者住宅で独居。	ゆっくり時間をかけて説明を行った。また、施設の職員が、その都度安心できるように説明をした。	説明後は「分かったわ」と言って安心した。
13	28	物の置き場所を忘しまう	家にある物の置き場所を変えてしまうため、必要時に使用できずに困ってしまう。	居宅介護支援事業所 ケアマネジャー	独居。	不明になっている物は一緒に探した。	本人は、一緒に行くことで探し物が見つかり安心した。